T・G・マギー著

『東南アジアの都市——東南アジアにおける primate city の社会地理学——』

T. G. McGee, *The Southeast Asian City: A Social Geography of the Primate Cities of Southeast Asia*, New York, 1967, 204 p.

I

現代における都市の急激な拡大，大都市実現を支えている基礎は，人間および物資の移動の自由と，農業，工業，運輸・通信など産業部門のあらゆる面における一連の技術発達，およびそれによってもたらされる社会構造の変化である。産業革命を基本的契機としてその後の工業化，経済発展の過程はまさしく都市の発達過程でもあった。そういった意味で，都市人口の増大，都市化の進展は国内の経済発展と密接に関連しており，欧米を中心とする先進工業地域でもっとも一般的，具体的に観察される傾向であった。

ところが，最近ではかかる都市人口の増大傾向が先進地域のみならず低開発地域でも同様に認められる。1950年代の10年間をとってみても，世界の都市人口推定増加分3億5000万のうち2億以上が低開発地域での増加であったといわれる。工業化の進展がまだ十分でないこれら低開発地域での都市への人口集中，都市の発達はいかなる条件にもとづくものであるか。また，これらの地域における都市は内部構造的にいかなる特質をもち，社会経済の発展に対する役割の評価はいかになされるべきであろうか。

II

本書の目的は，東南アジア地域における都市の分析をとおして第3世界 Third World (注1) の都市問題を解明することにある。副題が示すように，対象としては主として東南アジア諸国の primate city（最大都市）(注2) がとりあげられ，分析は社会地理学の立場からなされる。著者は現在ニュージーランドのウエリントンにあるヴィクトリア大学地理学科の新進気鋭の講師で，1960年から1964年にかけてはマラヤ大学地理学科で客員講師を勤めたこともある。都市地理学を専門分野として早くから東南アジアに関心をもち，1960年の *Pacific Viewpoint*（第2巻第1号）に掲載された "Aspects of the Political Geography of Southeast Asia: A Study of Period of Nation-Building" を皮切りとして本書出版までに合計七つの論文（いずれも東南アジアの都市に関するもの）を発表している。

（注1）著者が本書でいう第3世界とは，K・ブキャナンの提示した地域概念に依拠して，中国，キューバ，北ベトナムなど社会主義圏も含む低開発地域全体のことである。詳しくは Keith Buchanan, "Profiles of the Third World," *Pacific Viewpoint*, Vol. 5, No. 2 (1964), pp. 97～126 を参照されたい。

（注2）'primate city' の定訳は見当たらないが，あえて訳せば「最大都市」とでもいえよう。概念的には，一国内で最大の人口規模をもつ都市のことで，しかも primate city と呼ばれるためにはその人口規模が2番目に大きい都市の2倍以上でなければならない。現在の東南アジア諸国でみられる大都市はいずれもこの条件を十分すぎるほど満たしている。

III

本書は下記のごとく全10章からなる。第1章はいわば序章で問題および基本的視角などが示され，つづく第2章から第4章までが東南アジアにおける都市の史的展開過程，第5章以下第9章が現在の都市の諸特徴と問題点，そうして最後に第10章で将来の展望がおこなわれる。以下各章を追って主要論点を中心に簡単な内容紹介をおこなってみよう。

第1章　東南アジアの都市と第3世界
第2章　東南アジアにおける在来都市—都市化の第1段階
第3章　西欧のインパクトと植民都市の萌芽
第4章　植民都市の登場
第5章　現代文明の中心地 modern cult center—今日の東南アジアの都市
第6章　東南アジアの都市の人口学的特徴
第7章　東南アジアの都市における経済パターン
第8章　東南アジアの都市における居住パターン
第9章　東南アジアの都市におけるスラムとスクオター

第10章　東南アジアの都市の将来

第1章の主たる論点は第3世界における都市化の基本的性格についてである。著者はここで欧米における経験を真の都市化 true urbanization とし，それとの比較で第3世界にみられる都市化を偽装都市化 psuedo urbanization であるとする。19世紀にはじまる西欧諸国での都市化は，技術革新による生産力の飛躍的発展，つまり産業革命を契機として急速に進んだ。都市における産業の発達は，一方でそこに新たな雇用機会を大量に創出し，他方で農業における生産力増大をもたらした。その結果，農村から都市に向かって大量の人口移動 rural-urban migration がみられるようになり，都市人口の急速な増大がおこる。いうまでもなく，新たに人口集中をみた都市では社会経済構造の変革がおこり，農村社会とは異質の都市社会の形成がみられるようになった。つまり，都市人口の増大は具体的には農村人口の都市への流入を通して，社会全体の工業化＝経済発展と相携えて進んだのであり，その意味では都市化，都市人口の増大は経済発展のメルクマールでもあった。

ところが，今日の東南アジア等第3世界で一般にみられる都市人口の急激な増加は，経済発展を基礎としたものではなく，むしろ工業化の失敗と発達した医療知識の輸入による人口増加率の上昇とが結びついてひきおこされたものと考えられる。つまり，高い人口成長率は既存の都市の人口増加を推し進めると同時に，生産力停滞のはなはだしい農村での人口圧力を高め，農村人口の都市への流出をもたらした。かくして激増する都市人口は，しかしながらそこでの産業の未発達のために十分吸収されえず，西欧の経験とは異なる幾多のひずみを内蔵する結果になっている。これを著者は偽装都市化と呼ぶ。一般に都市は社会経済的変化の中心地であって，そこでの変化が社会全体の変化を代表し反映すると考えて差支えないが，第3世界における偽装都市化の場合にそのような捉え方をするのははなはだ不適当であって，都市とその背後にある農村の関係，そのあり方こそが把握されるべきもっとも重要な課題であると主張する。

東南アジアにおける都市の史的展開過程はおおまかにいって四つの時期に画すことができる。第1期は西欧諸国の東洋進出がはじまる以前の時期（15世紀以前），つづく東洋進出から本格的植民地支配が確立するまで（16世紀から18世紀にかけて＝第2期），本格的植民地支配の時期（19世紀から第2次世界大戦まで＝第3期），そうして政治的独立を獲得した後の時期（第2次世界大戦後＝第4期）である。

第1期については第2章でとりあげられる。これはいわば東南アジア土着の都市が発達する段階で，形態的には交易都市 market city と神聖都市 sacred city に大別される。前者は域内の交易中心地で，その経済的富の源泉はいうまでもなく交易から生じ，15世紀のマラッカがその典型である。後者はアンコール・ワットによって代表されるように統治者または国王の世界観，宇宙観を反映したもので，農業の余剰が基礎であった。

16世紀にはじまる西欧諸国の東洋進出は，かかる在来都市を多少なりとも変容せしめると同時に，新たな勢力の拠点都市（＝植民都市の萌芽）の発生をもたらした。これが第2期の最大の特徴である（第3章）。当時の西欧植民地勢力は基本的に重商主義段階にあって，海上権制覇とそのための安定した拠点確保を最大の目標とし，一部にキリスト教の布教が付加されていた。こうした拠点都市のほとんどは在来都市のなかから創出されるが，なかには，まったく別個に新たに建設されたものもあった。もちろん，この段階での西欧勢力による支配はまだ完全ではなく，したがって新たな拠点都市も在来の交易都市，農業に基礎をおく都市（この時期にはいわゆる神聖都市はほとんどみられなくなる）との間に都市ヒエラルキー上決定的な力をもつには至っていなかったと考えられる。

19世紀になると西欧諸国の対植民地政策に重大な変更がみられるようになる。つまり，西欧の資本主義はそれまでの重商主義段階から自由主義，さらに帝国主義段階へと移行し，本国の工業発展が製品市場と原材料市場の確保を強く要請するようになる。商船の発達，スエズ運河の開通は西欧列強間での植民地争奪をいっそう激化し，植民地に対する支配の貫徹とその拡大を緊急の課題とした。第4章ではこの時期（第3期）の都市の発展過程がとりあげられる。

第3期における最大の特徴は，植民都市の確立とその飛躍的発展を通しての primate city への成長である。植民地支配の貫徹という目的を実現するためには，当然植民地における行政組織の整備拡充，交通・通信網の確立，港湾の新設，等々が必要となり，それまでは単に拠点でしかなかったものが植民地的搾取の中枢都市として確立してくる。しかも，その発展は急速で，またたくまに primate city として植民地における都市ヒエラルキーの頂点に君臨するようになった。かかる植民都市の特徴は，臨海ないし河岸立地であることとその機能の多様

性——植民地的搾取の中枢，交通・通信網，教育，文化，行政の中心地，軍隊の基地——である。

ここで，植民都市の社会・経済的発展に対する役割の問題がとりあげられ，その寄生的，劣性学的性格が強調される。経済的には，植民都市は域内の天然資源および農民の収奪をおこなう中心地であり，貨幣経済，商品経済の浸透を通して農民の没落と農村工業の破滅を促進する。その結果，都市と農村の間の格差はますます拡大し，農村の都市からの疎外化が進む。他方，都市が集積する価値は大部分が海外に流出して国内の発展には回されない。こういった意味で，それがはなはだしく寄生的であるといわざるをえない。植民都市は社会・政治・文化の面でも重要な地位を占めるが，都市内部の二重構造的性格が発展的役割を阻止する。つまり，海外から持ち込まれる西欧化の諸要素はそこに住む外国人と西欧化された土着エリートの間にだけおよび，その範囲を出ない。導入される諸外国の文化も，都市内部での人種別隔絶がそれぞれの範囲内に影響をとどめ，全体としての文化変容をもたらすまでに至らないのである。

第2次世界大戦後における東南アジア諸国の独立は，長い植民地体制の矛盾の政治的解決であった。もちろん植民地的従属経済体制はその後もひきつがれるが，それまでの植民都市は政治的独立によって少なくとも新しい段階にはいったとすることができる。第5章から第9章にかけての諸章ではこの段階における都市，つまり現在の大都市の分析がおこなわれる。

第5章の主要論点の一つは，戦後における都市人口の急増を支える要因についてである。一般に，とくに西欧諸国での都市化の経験によると，都市人口の増加は，都市の側での労働力需要という吸引 pull の要因と農村側での農民層分解ならびに技術改善にともなう労働力析出 push の要因が同時併行的に作用して rural-urban movement をひきおこした結果である。ところが，東南アジアの場合，都市における工業の未発達が吸引要因をいちじるしく縮小し，もっぱら農村側での経済的貧困と政治的不安にもとづく析出要因が一方的に rural-urban movement をひきおこしている。加えて最近の高い人口成長率が都市人口の激増傾向をもたらしているとされる。

次の論点は，都市における社会構造の変化についてである。戦後の東南アジアにおける大都市の人口増加は，たしかに人種別構成を絶対的にも，相対的にも変化させた。かかる変化は，理論的には当然社会組織，個々人の社会的関係といった側面での基本的変化をもたらすものである。ところが，東南アジアの都市ではそういった社会変化が依然としてみられない。というのは，人口の複合的構成，国内での異なる言語集団の存在，二重経済構造といった植民都市の諸特徴が，土着の都市流入民をして都市境界内部での農村的生活を可能にしているからである。これら伝統的生活を営む土着の市民にとって，生活行動の合理性，洗練さ，技術革新に対する進取的態度，等々の変化をとらしめる必要はない。このことが，全体として都市社会の構造的変化を阻害している根本的要因と考えられる。

もう一つの論点は都市の社会・文化的役割についてである。独立後の東南アジア諸国の大都市に期待された最大の課題の一つは国家的統一意識の形成であった。これを具体的に担い指導していくのは，都市のエリートであり，エリートを養成する場は都市に集中している教育施設である。ところが，都市のエリートというのは主として植民地時代に西欧の価値観によって教育された連中であり，かれらが抱くナショナリズムも，またかれらによって行なわれる教育もけっきょく自国の価値，とくに農村の価値とは無関係の西欧化されたものとならざるをえなかった。その結果，都市による国家的統一意識の形成どころか，逆に農村の都市からの離反へと導くことになった。農村の都市からの離反，これこそは今日の東南アジアの大都市がかかえているもっとも根本的な問題の一つである。

第6章から第8章にかけては，各章ごとに東南アジアの大都市における人口学的特性，経済活動パターンの空間的配列，居住形態についての分析がおこなわれる。そうして著者は，それぞれの国の社会文化的相違にもとづく都市相互間の人口構造的差異，バザール型の経済 bazaar economy から企業中心の経済 firm-centered economy への移行期にあることからくる経済活動の空間的配列の無秩序，植民地時代に形成された居住パターンから新たな段階への移行的局面にあること等，主として西欧の都市との差異を指摘し，けっきょく現在の都市が，基本的に西欧型に向かう過渡期にあるとする。

東南アジアの大都市に共通する居住形態上の一つの特徴は，スラムとスクオター（不法土地占拠者）が併存してみられることである。スラムは本来工業都市に，スクオターは農村での居住の進展に随伴する現象であるが，東南アジアの都市では両者が同一都市内部に併存してみられる。しかも，両者の人口を合わせると，実に都市人口の3分の2近くにも達するという大きい比重を占める

に至っている。このことから，第9章ではスラムとスクオターの問題がとりあげられ分析が進められる。

著者はこれらスラムとスクオターを東南アジア諸国が投資と人口の流入において都市と農村の間に一定の均衡を保持しうるような総合的経済政策実施に失敗したことからくる問題として捉える。これらの地区の現状は政治的にみて潜在的起爆装置に等しく，その解決は緊急を要するが，それには総合的接近があるのみで，部分的暫定的方策（たとえば移転，再入植促進など）が失敗をみることは明らかであると主張する。

第10章では本書の結論として東南アジアの大都市の将来が展望される。著者は本章で農村の離反が primate city の運命を握るかぎになるであろうことを予言する。その論理は次のとおりである。戦後の東南アジアにおける都市化は，西欧の場合と異なって国民国家的統一がまだ十分に達成されていない段階ではじまった。そのために，都市の主たる任務が経済的なものをかなりの程度まで無視して統一的国家意識の形成という政治的課題に向かわざるをえなかった。ところが，国家意識形成に対する過度の努力は経済発展の遅れを招き，当然の結果として農村の都市からの離反に追いやる。また，植民地時代の遺産である単一大都市の卓越は，上記の政治的課題に対する基本的態度を都市中心主義的なものとし，その意味からも農村の離反を推し進めた。かくして農村の離反が進むと，都市のエリートはその統合にあたってますますカリスマ的あるいは強権発動といった方向をとり，それがさらにいっそうの離反へと導いている。

かかる矛盾とその悪循環は，都市および農村でのいちじるしく高い人口の自然増加によってさらに悪化していく。もちろん，それぞれの内部で当面は解決できる要素もあるが，それにはおのずと限界がある。したがって，なんらかの根本的変革がおこなわれないかぎり，矛盾は起爆点に向かって絶えまなく近づいていくとみなければならない。こうして，東南アジアの大都市の重要性は，変革というドラスティックな形をとるにせよ，改善という穏和な過程をとるにせよ，将来相対的に低下せざるをえないであろう。そうして，やがては大都市卓越の時代が終わると考えられる。

IV

以上が内容の大まかな紹介であるが，本書の最大の意義は東南アジアの都市問題を総合的に取り扱った数少ない労作の一つであるということに求められる。これまでの東南アジアの都市に関する研究は，おもに個別のモノグラフ的なものが多かった。そのかぎりでは問題を統一的に把握し理解することが困難であった。もちろん，本書がそれを完全に解決しているとはいえないが，それはさておき問題の全体像を多少なりとも指し示し，またその糸口を与えてくれるものであることはまちがいない。内容紹介のところではとくにふれなかったが，調査事例，具体例の提示が，数多く盛り込まれている点も本書の特色で，東南アジアに興味をもつ研究者にとってしごく啓発的，刺激的であるといえよう。

東南アジアの都市問題は農村との関係という点にもっとも重要な視点を設けて把握されなければならないとする著者の立場は，内容的に非常に興味のある点である。植民地時代の遺産を大量に継承する東南アジアの大都市であるだけに，独立後の今日基本的問題が都市と農村の関係のなかに存在するであろうことは容易に想像され，まったく同感である。

こういった特色のほかに，いくつかの問題点も認められる。細かい問題は一応さておくとして，一つは著者のいう第3世界の都市問題解明ということである。第1章で第3世界における東南アジアの位置づけが試みられるが，それはけっして十分なものではない。したがって，東南アジアの都市の現状分析から出てくる結論を第3世界に共通する問題として結びつけることは大変危険であろう。

また，第9章で東南アジアの都市における中国人町をスラムと規定する見解が示されるが，これには大きな疑問を残さざるをえない。スラムは，社会学的には偏倚した人間関係の集団現象であり，建築学的には不良住宅の集団地区と規定される。後者の意味では中国人町はそれに近い状態にあるが，社会学的にはまったくあたらない。著者もこのことは一言しているが，にもかかわらずスラムという規定をすることは問題の本質をあいまいにするものと思われるのである。

（調査研究部　梅原弘光）